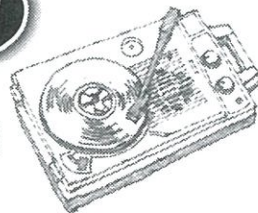


第112回 グループ同士を結びつけつつ 「別れ」を演出した影の男

昭和40年代の歌謡界でいくつもの輝きを放ったムードコーラスですが、彼らを支えた要因として、有線放送や「夜の女」と業界で呼ばれていたキャバレーやナイトクラブのホステスさんたちの応援がありました。しかし、いくらホステスさんたちの応援があったとしても歌自体に魅力がなければ、そうやすやすとヒットには結びつきません。そこにはムード歌謡の人気を長く維持させた制作側の功労者が存在しました。

黒沢明とロス・プリモスの『ラブユー東京』『たそがれの銀座』、美川憲一の『さそり座の女』、斉藤史朗やロス・インディオスで知られる『夜の銀狐』、敏いとうとハッピー&ブルーの『わたし祈ってます』、森雄二とサザンクロス『意気地なし』『好きですサッポロ』など、曲名を挙げていけばきりがありませんが、右記作品の作曲をすべて担当していたのが、中川博之です。

今年2月、マヒナスターズ在籍経験のあるタブレット純が『東京パラ



名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎
絵・松本浦

売されたジョージ山下とドライ・ボーンズというグループの曲をカバーしたもので、両曲とも中川の作品です（『東京パラダイス』は未発表曲）。

ドライ・ボーンズはロス・プリモスのリードボーカル森聖二がロスプリア加入以前に在籍していたグループですが、前出のハッピー&ブルーの敏いとうとサザンクロスの森雄二は、自らのグループ結成以前にザ・プレイズメンというコーラスグループに同時に在籍するなど、コーラスグループという狭い業界内の離合集散により、グループ間で近い横の関係ができていました。

近い関係性は、これらのグループのLP収録曲や、キャバレーなどでのステージ用の曲にも共通するものが多く、特に欠かせなかったのが中川作品でした。まさにお互いカバーし合っていたわけで、中川ソングはグループ同士を結びつける役割としても貢献し、ムードコーラス人気を支えました。

中川の生み出す



メロディーはほとんどがマイナーコード（短調）で作られていて、男女の別れを歌うには適度な哀調とウエツト感を聴く者にもたらしにくれます。3つのコードでできてしまう演歌同様、似たようなメロディーに聞こえたとしても、ファンにとってはむしろそこに魅力を感じるのであって、ムード歌謡を安心して聴ける理由でもありました。大ヒットする曲は短調で作られたものが多い、これは当時の中川の持論でもありました。

余談になりますが、『ラブユー東京』で歌謡作曲家としてデビューする前、中川はCM制作会社のある担当者と懇意になります。やがて、その友人は中川のマンションを訪れるたびに大のミス터리好きだった中川の本棚から新刊を持ち帰りますが、辛らつな批評とともに返却するので、中川が「それなら、自分で書けば」とチクリ。やがて、そのひとことがきっかけとなって、ベストセラー作家、内田康夫が誕生することになりました。